16～17 世紀の英国における「バター」の評価や位置づけ、及び当時の英文学における乳製品のイメージについて

瀧澤英子

16～17 世紀の英国におけるバターは、広範な階層に属す人々にとって日常的な食物であった。美味であるのは言うまでもなく、栄養価の高さや生鮮食品である点などから、現代の感覚にもとづくとどちらかといえば高級な食品として富裕層に独占されていたと推されがちである為、この点は注意を要する。バターの庶民性は文学作品の事例のみならず、歴史的文献からも確認できる。

16 世紀初頭のロンドンに駐在したヴェネチアの大使は、赴任地での印象深い風景として、「テムズ河岸の上空にはトビが多く、子供らの手から、母親にもらったバターを塗りつけたパンをさらっていくこと絶えず」と回想している(qtd in Thrisk: 2006)。かしましい我が子の空腹しのぎにと母親たちが与えたパンは、おそらく香ばしさはおろか、水気を失い硬くなりかけた残り物であったと察する。子供の間食用にせめてもの工夫でバターを塗っていた状況が偲ばれる。

バターの庶民性は近年の歴史調査からも明らかになりつつある。やがて 17 世紀末以降に乳産業の工業化が急速に進むのを目前としながら、少なくとも 17 世紀半ばまでは依然、各世帯が家畜を飼い必要分の酪農品を自ら賄っていた。このように市場を介さない食糧経済は表立って記録に残ることが稀で、従来の研究で見落とされてきた部分であるが、例えばある世帯の帳簿を手がかりに、取引された家畜の頭数などから、どれ程の酪農産物が生産、消費されていたかを推し量るといった、これまでとは異なるアプローチにより新たな知見がもたらされつつある。(Dawson; Muldrew; Overton)

ところで庶民の食生活を支えたバターは、食糧政策のターゲットとなり、その規制を巡って議論を醸すこともあった。中世以来ローマ教会は、獣肉類と同様に乳製品を断食期中に摂取するのを禁じてきたが、16 世紀初めには信徒の喜捨に応じた特免状を発行し始めている。ルターを筆頭にプロテスタント側の論客は、この二重基準こそ教皇庁の腐敗を示す好例として糾弾し、平信徒の支持を求めた(Flandrin 2007; Albala)。英国は HenryⅧ世の破門をもってバチカンの干渉を絶っており、この論争の煽りを直接受けることはなかったようだが、人々が関心を寄せていた形跡はある。例えばネーデルラント人を「バター箱」の手放せぬ人々と揶揄する言い回しが、当時の大衆向けパンフレットや演劇台本中で頻繁に使われている。同時期のフランドル地方でカトリックを後ろ盾とするハプスブルク家との宗教戦争が長期化していたことを踏まえるなら、「バター箱」は単に特定の地域に住む人々の嗜好性をステレオタイプ化するのみならず、同時代人が直面する対立関係を仄めかすというきわめて政治的な語句表現でもあったと言えよう。

食糧規制そのものが英国にとって全く無縁だった訳でもない。カトリックに由来する慣例の多くが国教会主導の体制でも引き継がれ、断食も「魚食の日」と名を変え内乱前まで続けられていた。(Albala; Albala and Eden)。とりわけ周囲を海に囲まれた英国において、戦時に海軍を組織する為に確保しておきたい水夫達に平時の生業を与える目的で、漁業を保護する必要があった。ただしこの魚食日の食卓からバターは除外されず、むしろ重宝されたようだ。肉に比べとかく淡白になりがちな魚料理を少しでも風味豊かにしようと、フライ用の油脂に、又はソースとしてバ

ターが使われていた。「金曜日の魚は三度泳ぐ。即ち、初めは海で、次にバターの中で、最後に人の口中で」という洒落文句は当時の食物事情を垣間見せる。

さて、初期近代の英語文献におけるバターのイメジャリーを探求する際に、女性性の問題を看過することはできない。それは単に女性の身体に備わる授乳能力からの連想という生物学的な側面のみならず、上に述べた世帯における乳産業の大部分が、女性達により営まれていたという事情に大きく因る。家畜の管理と酪農産物の作製は主婦を始めとする女性達の仕事であった。しかし母獣の体調や気候環境が、乳量や酪農品の出来具合を大きく左右し、いかに細心の注意を払っても不本意な結果を招いてしまうこともあった。シェイクスピア作『真夏の夜の夢』において、妖精パックの登場する場面(2 幕 1 場)では、「ミルクの上ずみをくすねて村の乙女を驚かし、主婦が息を切らし撹拌したものを徒労に帰してしまうのは、他でもない君だろう」とこれまで人間たちに仕掛けてきた悪戯ぶりが仲間に労われている。我々はこの台詞から、現代科学で腐敗と定義される現象が超自然物の介在による結果として理解・説明され、同様の言い回しで女性達が弁解したり慰めあったりしていた様子をうかがい知ることができるのである。

興味深いことに、近世ヨーロッパを席巻した魔女裁判の記録において、乳業をめぐる訴えがかなりの件数を占めている。被疑者となった女性達は、隣家の牛に魔法をかけて乳の出量を操った、又は妖力で村のバターやチーズの出来具合に悪影響を与えたといった廉で裁きを受け、共同体に脅威を及ぼす存在として処刑されていった(Sharpe)。このように女性達は乳産物の気まぐれな性質に悩まされ、時にはその元凶として損害の責任を負わされもしたのである。

世帯で生産した農産物の余剰分を市や町に運び売りさばく仕事も女性達が担った。その行商姿と独特の節で客を呼び寄せる声はロンドンの路上を賑わし、『呼び売り声集』と題した挿絵付版画の冊子が度々出版されたほどである。中でも「バター売り」は「魚売り」と並び、特に威勢の良い存在として知られ、「バター売り女のごとくがなり立てる」という慣用句は、饒舌や騒音の代名詞としてシェイクスピア作品を含む多様な文献に見出せる。

このようにバターの生産、供給の場面で女性の存在が欠かせなかった状況下、バターそのものが女性性の表象となっていく。帝政期ローマの詩人オヴィディウスによる『変身譚』を 1567 年に英訳したアーサー・ゴールディングは、海の精ガラテアの姿を謳いその肌を「乳のように白い」と言い表した原文を「出来たてのバターに似て柔らかな」としている。バターのイメージにのっとり触感を喚起することで、より生身の女体を思わせる描写に成功している。

バターの「柔らかさ」や「豊潤」といった好意的なイメージと表裏一体に、「軟弱」、「変容性」のような消極的な意義も託されたことも忘れてはならない。「白日のもとバターの如く溶ける」や「バターの封印（のように脆い)」は、いずれも物事の虚飾が暴かれ脆弱な内実が露わになる様を言い表した諺であるが、男性の不面目を茶化す文脈での用例が目立つ。既に述べてきた「バター」と女性の結びつきを考慮するなら、男性として期待される要素を欠いた状態を、女性性のイメージにことよせ表した言説と解釈できる。

以下に総括すると、16～17 世紀英国における「バター」は広範な人々にとって身近な食物であったがゆえに、社会の各場面において多様な意義を与えられている。結果として「バター」の語は、時として相反する概念の両方を担うまでの多義性を帯びた。それら一つ一つの意義付けを検

証していくことは、食文化史を軸に、宗教、民衆文化、ジェンダーといった社会の諸相をひもとくことに他ならない。「バター」研究の奥深さを予想させ、今後の展開を保証していると言えよう。

〈参考文献〉

Albala, Ken. Eating Right in the Renaissance. U of California P, 2002.

--- and Trudy Eden. Food & Faith in Christian Culture. Columbia UP, 2011.

Applebaum, Robert. Aguecheek's Beef, Belch's Hiccup, and other Gastronomic Interjections: Literature, Culture and Food Among the Early Moderns. Chicago, U of Chicago, 2006.

Dawson, Mark. Plenti and Grase: Food and Drink in a Sixteenth-Century Household. Prospect, 2009.

Fitzpatrick, Joan. Food in Shakespeare. London: Ashgate, 2007.

--- . Renaissance Food from Rabelais to Shakespeare. London: Ashgate, 2011.

Flandrin, Jean-Louis. Arranging the Meal. Trans. Julie E. Johnson et al. Berkley: U of California P, 2007.

--- and Massimo Montanari eds. Food: A Culinary History from Antiquity to the Present. NY: Columbia UP, 1999.

Fussell, G. E. The Englsih Dairy Farmer, 1500-1900. London: Frank Caas, 1966.

Hallam, Henry. Constitutional History of England. London, 1832. Vol. 2. London: J.M.Dent, 1932.

Markham, Gervase. The English Housewife. 1615. Ed. Michael R. Best. Montreal: McGill-Queen's UP, 1994.

Muldrew, Craig. Food, Energy and the Creation of Industriousness: Work and Material in Agrarian England. Cambridge UP, 2011.

Overton, Mark. Agricultural Revolution in England: The Transformation of the Agrarian Economy 1500-1850. Cambridge UP, 1996.

Sharpe, James. Witchcraft in Early Modern England. Pearson Education, 2001.

Thirsk, Joan. Food in Early Modern England. London: Continuum, 2006.

Wall, Wendy. Staging Domesticity: Household Work and English Identity in Early Modern Drama. Cambridge: Cambridge UP, 2002.